

ご家族の皆様へ

## 9月「なんでもおしゃべり会」のお知らせ

8月に開催されたおしゃべり会では、「学齢期の保護者様」に限定して、「性のこと」をテーマに開催しました。平日の忙しい時間帯であったため、「本当は行きたかったけど行けませんでした」という声もありましたが、それでも数名のご家族にお集まりいただき、皆様でいろいろと話すことができました。おしゃべり会をしていて毎回思うことですが、やはり保護者同士の情報はとても大事ですね。支援者が知っている情報と、利用者である保護者だからこそ感じている情報は違うなあと思いました。9月は、全利用者のご家族対象です。ぜひ、お集まりください。

**日時:9月16日(水) 午前10:00~12:00**  
**場所:りとるの家 はなれ 市民交流スペース**

皆様のご参加お待ちしております



### リレーエッセイ

毎月お楽しみ『リレーエッセイ』！  
りとる職員が思い思いのことを書きます。  
普段は見えない職員の「新たな一面」がのぞける社外社内ともに人気のコーナー♪

今回は、「生活支援事業所きら」支援員の東澤と、「相談支援事業所らく」相談員の吉田です。

初めましての方は初めまして、関西弁が話せない滋賀県出身の東澤です。りとるらいふに入社してから6年が経ち、今まで「きら」だけでなく、「ららん」や「ぴっと」、「短期入所」などにも入らせていただいたおかげで、色々な方々と関わらせていただき、充実した日々を過ごしています。今はきらのご利用者様とはなれを清掃する清掃班を任されていて、毎日ご利用者様と清掃を頑張っています。少しずつですが、ご利用者様もスタッフの指示がなくても次の掃除場所を清掃したり、ドアや窓の拭き方もきれいに磨けるような拭き方になってきたりと、小さな成長を間近で見ることができ、とてもうれしく感じています。これからも清掃班とともに自分自身も成長し、はなれだけでなく、外部からの依頼を受けて、清掃に行けるように頑張っていきますので、今後もよろしくお願ひします。 東澤晃平



「一期一会」私の好きな言葉の一つです。「本当に人に恵まれているなあ」といつも思っています。これまでに出逢ったたくさんの仲間、日頃お世話になっている方々、もちろん「あなた」との出逢いにも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

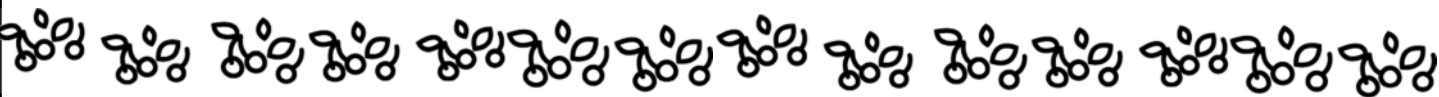


「なんで福祉の道に進もうと思ったの？」とよく聞かれます。「人が好きだから」が定番の答えです。とにかく人が好きで、誰かと一緒に話をしていたくて、笑っていたくて、そんな時間を作る仕事が出来たら幸せだろうなという想いが今の私を作っています。これからも笑顔いっぱい、元気いっぱいの私でいたいと思いますし、元気をちょっぴりみんなに分けてあげることが出来るような私でいたいとも思っています。

…なんてカッコいいこと言いながら、一番好きな言葉は「棚からボタモチ」だったりしますが♡

吉田有佳

来月は、「放課後等デイサービス事業所ららん」児童発達支援管理責任者の笹川と「総務」の豊岡です。  
お楽しみに！！



発行者：社会福祉法人みんなでいきる 障害福祉事業部りとるらいふ  
通信に関するお問い合わせ先：事業部代表 TEL025-542-0170（担当：久保）

# りとるらいふ通信

(社福) みんなでいきる  
障害福祉事業部りとるらいふ  
発行日：2015年8月

1年の中で、りとるらいふが最も忙しい時期は？と聞かれば、「夏休みの8月！！」と答えるかもしれません。毎年のことですが、朝から児童のサービスが動き出し、事務所内には、事務職や管理職以外はガラんとする日々が続きます。各現場に行くと、浅黒く焼けた子供たちが元気たっぷり迎えてくれて、忙しさの反面、その姿になぜか笑顔がでて元気がもらえる今日この頃です。



## りとる事業所紹介★パート4

### 居宅介護等事業所「へるぶ屋ぴっと」

第4回目を迎えました「りとるらいふの事業をちょこっとご紹介」のコーナーですが、今回は居宅介護等事業所「へるぶ屋ぴっと」をご紹介します。

現在私たちりとるらいふが提供させていただいているサービスの中でも、実は歴史が古い「へるぶ屋ぴっと」！！NPO法人時代のりとるらいふが、自立支援法の下、平成18年度から開始したのが、何をかくそう「日中一時支援事業所ららん（現在の放課後等デイサービス事業所ららん）」と、この「へるぶ屋ぴっと」でした。

「ぴっと」が提供する「行動援護」「移動支援」「居宅介護」などのサービスをご存じない方も多いため、とっても簡単に紹介すると、どれも「個別のニーズに応じて、その方の外出や自宅での入浴などに、マンツーマンでヘルパーが支援に入るサービス」です。例えば、「行動援護」や「移動支援」では、男性ヘルパーと一緒に高校生の男の子がリージョンプラザのプールに行ったり、七福の湯に行ってお風呂に入ったりと、その方の生活プランの中で必要な外出に対して、専門の研修を受けたヘルパーと一緒に支援します。また、「居宅介護」では、その方の自宅に伺い、ご家族に代わって入浴や整髪などの支援をします。

そんな「へるぶ屋ぴっと」だからこそ、他のサービスと違い、「個別の重要性」と「公共での重要性」を大事にしています。生活介護や放課後等デイは集団支援ですが、「ぴっと」が提供するサービスはすべて個別支援です。そのため、ご利用者様の本当のニーズをきちんと把握し、他の誰でもなく「その方」へのプランを実施できます。それは、じっくり向き合える喜びも大きいですが、反面、ヘルパーは開始から終了まで100%自分の責任においてその方のプランを実行せねばならず、それは時には判断に迷い、距離感を迷うことも多くあり、とても難しいサービスだなあと思っております。

また、他のサービスは、法人の事業所内という「ホーム」に来ていただくものですが、「ぴっと」のサービスは反対にヘルパーが自宅や公共施設という「アウェイ」へ出てゆきます。つまり、サービス提供時の支援は常に周りで見られていることになるのです。例えばコンビニで、例えばジャスコで、ヘルパーが支援している姿は、ある種「支援者の代表」のように見られているのだと私たちは考えています。ヘルパーが楽しそうに過ごしていることは、障害を持つ人と過ごすことが明るいこととして見えますし、反対にヘルパーが大変そうに過ごしていれば、障害を持つ方の支援は大変なのだとも市民に意識付けさせてしまいます。ご利用者様が公共施設の中で他の市民同様と同じように自然に過ごせるよう支援することもヘルパーの力量ですが、その支援する自分自身の姿も広告塔なのだという意識はすごく重要だと思っています。

今日も、赤いステラが上越の町を走っています。もしどこかで見かけたら、ぜひ声をかけてくださいね。





## アール・ブリュット展に関するご報告

先月開催されましたアール・ブリュットの来場者数と署名数について、皆様にご報告です。

なんと期間中にご来場いただきました総人数は、2,187 名にもなりました。様々な方がご来場され、10代~60代まで幅広く世代を超えて鑑賞していただけたようです。

また、会場にて皆様方よりいただきましたご寄附の総額は、12万4310円となり、常設展（美術館設立）のためのご署名も600名を超える方々よりいただきました。ご協力いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。この署名はアール・ブリュット展の期間終了後の現在も、目標5000名を掲げて法人内や企業グループ内などで協力を呼び掛けており、目標まであと1300名弱の署名が必要となります。今後も様々な場所でご署名をお願いしたいと思っておりますので、ぜひ上越にアール・ブリュット美術展が常設できるよう、本誌をお読みの皆様にお力添えをいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。

ここで、今回ご来場いただきましたお客様のアンケートより、一部感想をご紹介します。

- ◆一つのことに熱中し、想いを作品として仕上げる事、これは障害のあるなしに関わらず、大切なこと。障害のある人々を見つめ、その人の想いが作品として仕上げられたことは、これから生きる人々の思いやりであると思います。考えさせられたひと時でした。
- ◆東京都より、この展示会のために来ました。ずっと本物を見たいと思っていた方々の作品が多く、とても満足できました。私自身、特別支援教育に携わっているので、こういった展示会や美術館設立はとてもすばらしいと思います。ぜひ東京でもやっていただきたいです。ありがとうございました。

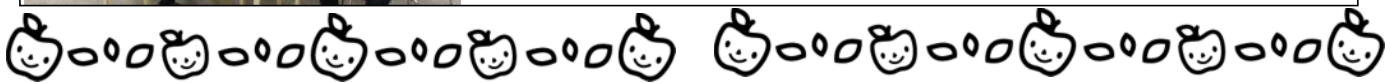


## 就職フェアに行ってきました！

今月号の副理事長コラムにもありますが、先日8月1日~3日まで東京虎ノ門にて、福祉団体による福祉就職希望学生に対する就職フェアが開催され、当法人も参加してきました。北海道から沖縄まで、本当に全国からたくさんの事業所が参加しており、会場には100名以上の学生が来場しました。全体説明のあと、各ブースで

事業所が待っており、そこに興味のある学生が話を聞きにくるスタイルでしたが、初めて参加する私たちもドキドキ。学生は、日々有名大学で福祉を学び、福祉現場でのアルバイト経験から想いの強い子ばかり。参加してみて感じたことは、福祉を

目指す学生はまだたくさんいるのだということ、そしてその真剣な姿や口調からは熱い想いの同志が増えるのだなあという喜びでした。これまで、県内での就職フェアのみに参加していましたが、初の全国舞台に出て、今後のりとるらいふを担ってくれる強い仲間を全国レベルで探すことができ、また一歩前進できたのかなあと感じます。



## 「介護職は低賃金・重労働」と教科書に記されたことは何を意味するのか？

社会福祉法人みんなでききる 副理事長 片桐公彦

介護の仕事が「重労働で低賃金」と記述している2社の教科書について、介護業界6団体が「表現が不適切」として出版社に修正を求める要望書を提出したというニュースが先月、話題になりました。

まがりなりにも社会福祉法人を経営する立場からすると、必死になって職員の方々の処遇改善をしている努力に冷水をかけられた感じがします。さらにこれが「正しいことの標準モデル」を示す教科書に掲載されたことが余計に気持ちを悲しくなります。業界団体が要望する気持ちも分らないではありません。

厚労省による平成25年賃金構造基本統計調査によれば、「社会保険、社会福祉、介護」分野の年収は340万円（平均41.2歳）です。全産業の平均は480万円くらい（平均42.1歳）なので、確かに「組織の規模も分野も問わない平均」と比べれば低いという印象になると思います。しかし企業規模10~99人の平均賃金は全産業の平均でも384万円ほどです。福祉分野は女性職員も多いので、同規模の女性の全産業平均賃金は310万円。同規模の福祉分野の女性の平均賃金は316万円です（ちなみに男性は372万円）。小さな法人の給与としては一般的な平均と実はそんなに変わりません。

それでもなお、教科書に「介護は定賃金で重労働」という「統計上誤った」表記が掲載されたのは何故なのかと思います。ここからは私の完全に個人的意見ですが、おそらく教科書の執筆者は「それほど深く考えもせず」この文言を書き込んだのではないかと思います。それは従軍慰安婦のことを教科書に書くとか書かないとかそういう問題よりもずっと「気軽に」取り扱われたものではないかと。要するに「そういうものだろう」というイメージで書き込まれたものであろうと思うのです。もしこの仮説が合っているならば、問題はさらに深刻で、すでに介護や福祉の業界は「定賃金で重労働」という相当に固定化されたイメージとして世の中に認識されているということになります。

これは、これまで福祉事業に長らく従事してきた先輩職員としての我々の責任も大きいと思っています。これまでの福祉の仕事は根性や精神論や気合いや若い労働力に依存してきました。職員の入れ替わりが早いので、全体的な人件費は総じて安く抑えられます。そういう構造の中でしか福祉事業の経営が成立していないということに反省をしなければならぬと考えています。（もちろん報酬の問題もあるのですが）

昨年、スウェーデンに視察に行った時に政府の関係者と食事をともにしました。彼らの働き方は「20時の帰宅は超遅い帰宅」という定義になっているようで、国会の会期中でも定時に帰宅するそうです。我々の業界に（特に組織のトップに）ありがちな「長時間勤務・短睡眠時間自慢」には本当に呆れた目で見られました。そしてこれは公務員だけに限ったものではありません。

かなり以前、とある老舗の社会福祉法人の理事長の挨拶を読んだことがありました。細かい内容は忘れてしまいましたが、その中には「障害のある人たちの暮らしを支えるために職員に厳しい要求をしてきた。全ての生活を捧げる

ように指導をしてきた。何人も去っていったが、それでも私は前に進むしかない」とか、そんなような言葉並んでいました。当時、組織を作ったばかりの私はその文章に震え、大層感動したのを覚えています。ちなみに今、その法人には人が全く集まってきません。今の時代に当てはめて考えれば完全に「ブラック企業」なわけですね。

私が尊敬する実践をしているとある法人では入職して数年は障害のある方とグループホームで一緒に暮らすことを義務としています。久しぶりに声を交わしたら「本当に人が集まらない…」とこぼしていました。実践は最先端でも最も大事な資源である「人材」のところで重大なミスをしていました。

私もここ数年で人の採用についてはずいぶん痛い思いをしました。その責任は全て私にあります。人を大事にしているつもりでしたが、仕組みとして構築できていなかったために随分と職員の心も生活も傷つけたと思います。今でも少々綱渡りなどところどころありますが様々な経験の中で私自身の心にも変化が芽生えてきました。

そんな変化の表れが、今回の「みんなでききる」のリクルートサイトです。強く「人」にフォーカスした組み立てになっています。この仕事の魅力を私たちができる範囲で精一杯表現したつもりです。

《みんなでききる リクルートサイト》  
<http://www.minna-de-ikiru.org/recruit/>

「介護は重労働で低賃金」と教科書に「何の疑問もなく、当たり前」に書き込まれるこの時代に、私たちはこの仕事の魅力や素晴らしさ、美しさや尊さをもっと真剣に、具体的に表現しなければなりません。先日、とある団体が主催した就職フェアが東京虎ノ門にて開催されたので「みんなでききる」も参加してきました。全国の多くの法人が「真剣」に「具体的に」この仕事の魅力を伝えるために工夫をこらしていたとの報告を受けました。全国に目を向ければ、危機感のある法人は皆、この世界の労働環境を近代化させようと試みています。私たちがそこに向かっていかなければなりません。そう、「介護は重労働で低賃金」なんて言わせないために。

今に見ている教科書よ。この福祉の世界は、本当は実に実に素晴らしいんだぜ。ペイビー。

